
白銀恋

花餞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀恋

【Zマーク】

Z9321P

【作者名】

花饅

【あらすじ】

死を予言された日より、生き延びてしまった少女。
その日に少女は、初めての恋をした。

血飛沫だつた。

その後に続く、魔性の断末魔。

更に続く、人々の断末魔

気付けば己の周りには、魔性も人も居なかつた。

けれどもその血塗られた世界の中で、彼女は見た。

決してぶれる事の無い、揺らぐ事の無い、静謐の中の静謐。

けぶるよつた白髪と、儂き光の銀瞳と、血の滴るよつた朱唇。

ただただ人間である己にとっては、究極の美であった。

* * *

アツシヤラーダ王国、セイントン地方。

デイン大陸の北方に位置する王国の、更なる北方。

最果てのセイントン 。

世界は、独自の文明を築いた 神の末裔でありながら長き生を生きたが故に、その能力で他者を圧倒し、支配しようとした者 . . . 今は勝者の名によつて【闇の者】と呼ばれる神の末裔 魔性と、

その魔性達から文明をかすめ取り、これもまた独自に発展させた人間とが居た。

デイン大陸には七つの王国があり、その中の幾つかの地方には【闇の者】達が独自に住み着いている。

セイントン地方もその一つ。

ここは、【闇の者】の中でも高位とされる 吸血鬼の王が統べる 土地だつた。

ラクリモサはその居城、灰の城の前に居た。

我ながら、何をしようと思つていいのかが判らない。
判らないけれども、ここに来た。

セイントン地方の空は、いつも曇り空だ。
陽の注す時などあり得ないと、村の人々も言つていたほどだ。
確かに高い空には暗雲。

己の前途のようだと笑いたくなつた。

「おうおう、可愛いお嬢ちゃんじゃねーか」
「どこに行くんかい？」
「この先には灰の城しかないよー？」
「 その、灰の城に用があるの」

目の前に居るのは、人狼達だ。

魔性の祖が神である事は遠い伝承だが、きっとどこかで歪められたに違いない。

こんな者達が神の末裔であるものか。

「灰の城に行つても、面白い事なんか何も無いぜ？」

「それより俺達と遊ぼうぜ、お嬢ちゃん～」

「・・・触るな！」

ラクリモサは人狼の手を払い、駆け出した。

勿論それで見逃してやる魔性達ではない。

灰の城の城門が見えた。

そこで、追いつかれた。

後ろから強く追突され、地面に引き倒された。

「いた・・・・・」

「逃げる事ないでしょ～」

「遊ぼうぜ」

「いや・・・離して！あなた達になんて用は無い！」

叫びと共に、衣服が避けた。申し訳程度にだが暖を取れるものだつたそれは、簡単に布切れと化した。

小ぶりな乳房に、人狼の爪が食い込んだ。

「いつ・・・・・」

「ちいせえなあ

「揉んで大きくしてやりやいいだり」

冷たい土床に押し倒され、人狼が群がる。

「やだ・・・やだつ！」

「灰の城の門は、門そのものが開かないんだぜ？」

「吸血鬼の王だつて？あははっ、そんなものがどこに居るんだかなあ？」

「お前さんなんて、ペロリと食べられるだけだらつよ

「俺達と遊んでる方が絶対楽しいって」

剥き出しの乳房に爪と舌が絡む。

痛みとかすかな悦と恥辱に涙が滲む。

「 てか、俺達が結局ペロリと食べちまつんじゃね?」

「 違いねえな!」

「 あひやひやひやひや……」

「 ……ひや

そつしてラクリモサはまた、見る。

血飛沫だつた。

その後に続く、魔性の断末魔。

「 あ、ぎや・・・あああーー!」

「 腕が!腕がつ、ひい!」

「 ひい

・・・・・

その先に、冷たい風。

曇天。

血に塗れたラクリモサは、だが、それだけだった。

それ以外の被害は、血塗れである事、衣服がボロボロな事。
それだけだった。

田の中に血が入つて痛い。血を、異物と感じるが故だりつ。
のろのろと腕だけ動かして、擦つてみた。潤んだ涙と混じり合つて、
頬に滑り落ちた。

この血塗れの中で、見たのだった。

白と銀と赤。
吸血鬼。

けれども今は無い。どこにも無い。

今度はのろのろと軀を起こす。まだ、乾いていない人狼の血が、滴り落ちる。

次に見ると、城門が開いていた。

「…………」

そうして田の前に、一人の女が居た。

「どうぞこれを」

ふわり、と上質の絹布が掛けられた。一瞬でくるまれたと思つと、今度は軽く女の腕に、抱きかかえられていた。

「あっ・・・・・」

「綺麗に致しましょ、」
「あらへど、」

ラクリモサはそうして、灰の城の中に吸い込まれるように消えた。

城門は、音を立てて閉まった。

手で掬い上げてみた。

こんなにたくさんのお湯を見た事が無い。

ラクリモサは貧しい村の生まれだ。水を温める為の薪すら儘ならない。

そんな村で、湯に触れる機会などどれだけ在っただろうか。

たぶん、あの、最後の日だけ、だ。

周りから一瞬で音が消えた日。

溢れた鮮血と錆ついた馨り。

あそこで潰えた時間は私のものだつたはずなのに。

そのうち、自分を抱きかかえてここに連れてきた女性が姿を現して、湯船からラクリモサを救い出すと、丁寧に洗い始めた。

その女性は美しい亞麻色の髪と同色の瞳と、小麦色の肌を持つていた。

この地にそぐわないほど奇異な色でありながら、ラクリモサはそれを綺麗だと感じた。

ラクリモサの髪は黒緑 黒髪の中では類いまれなる美色と謳われるらしいが、栄養が行き届かぬ故その名残も無い。
肌は白皙。けれども、やはり肌の艶を失っている。

磨けば価値のある物として光るだろ?と思わしめる素材だ。

「あの・・・どうして?」

「・・・・・」

「どうして助けてくれたの？」

「全ては主様の『』意向ですので」

「・・・・・・・」

主様とは、あの時の人かしら。

私の運命を狂わせた人。

そうだといいんだけど。

ラクリモサは、やはり袖を通した事の無い絹のドレスに包まれて、見た事も無い、食べ物と思われるものを食べて、やはり包まれた事の無い質感の良い襦袢に眠っていた。

そこへ、音も無く訪う存在が在った。

銀瞳は伏せ目がちにラクリモサを見下ろしている。
白髪が音も立てずに肩から滑り落ちる。
朱唇が、何か音を奏でた。

「・・・・・・・・・・・・」

あの邂逅は何かしらの縁を結んだのだろうか。
彼には気まぐれであったのに。

あの時見たやせ細った少女は、村人達に殺されそうになっていた。
多勢に無勢。
とにかくにも、彼は気まぐれで少女を救つた。

一瞬合わさつた目見。

過ぎて行く時間と同じように少女もそのまま通り過ぎるのだと思つてゐたのに。

今、陽光差し込む部屋の一室で、彼はラクリモサに向かい合っている。

• • • •

— ● ● ● ● あの「

ラクリモサの声に、彼は

卷之三

その朱唇は 真一毛

二、自、なのだね？

何故なら目の前の彼は、高位の魔性。
吸血鬼だ。

「・・・・食べぬのか?」

「…………えと」

「今は、朝食の時間だと思うのだが」

余計な事は話さず、食べろといつ事なのだろうが。
湯気の立つた卵料理、同じく湯気の立つた温野菜、酸味のきいたドレッシング。

焼きたてのパン。新鮮な果物のジュース。

ラクリモサは、もやもやと、食べ物を口に運んだ。

「…………あの」

「アシュイート」

「…………え？」

「私の名だ、アシュイートと言つ」

「あ、えと…………私……ラクリモサ……」

違う、名乗り合つてゐる場合じやなくて。

本当に辿り着いてしまつたのならば。

目の前に彼が居るのならば。

言わなければならなかつた。

「…………責任取つてください」

「……………………？」

少女の言葉に、アシュイートは首を傾げた。

「責任、とは？」

「…………あの日」

ラクリモサがアシュイートと出合つた日。
それが始まりで、終わりだつたはずの日。

「私の命は、あそこで終わるはずだったんです。そつ、予言をされました」

常に飢えている村だ。

生贊という名田で、人減らしが公然と行われていた。
あの日、ラクリモサも生贊になるはずだったのだ。
何に捧げるかも判らない生贊。

「あの日より先に私の未来は無いって言われていたんですね」「…………」「だから、どうやって生きていいいのか、判らないんです」「…………その予言を信じて生きてきたのか」「はい」

「その日に死ぬためだけに、生きてきたのか」「…………」「…………」

その為だけに？

本当にそうだろうか。

それより先に死んでもいいだろ？し、それより長生きだつてしま
いい。

自分はその時に死ぬ為に、生きてきた訳ではない。
何のためか判らないけれど、そうじやない。

でも判らない。

その先に私の未来は無かつたんだもの。

押し黙つたラクリモサに、アシュイートは・・・少し、唇の端に
笑みを浮かべた。

硬質の中に埋もれたかすかな柔軟。

ラクリモサの小さな胸さえ、感動と羞恥でいつぱいにことわぬほど微笑。

「その予言者は、判るはずも無からひよ

「え・・・・・」

「あの日より先にそなたの未来が無こと言ひよのせ

密やかにあの情景が浮かぶ。

「予言者自身があの日、死んでしまったからだ

その先に生き残ったそなたの事など、知る由も無からひよ。

アシュイートは言つのだ。

そなたの未来がその先に無いのは。

予言者より生きながらえる運命にあつたといつだけの事だと。

「・・・・・・・」

考へてもみなかつた。

あの日確かに、自分以外生き残つた者は居ない。

あの日、確かに予言者が死んだ。

その魂を振り切つて、自分は由き吸血鬼の田の前に居る。

「・・・・・だが、そうだな、責任は取るひつ」

「・・・・・・・・・・・・」

「望むなら、人としてのそなたを殺してやるが?」

決してぶれる事の無い、揺らぐ事の無い、静謐の中の静謐。
けぶるよつた白髪と、燐き光の銀瞳と、血の滴るよつた朱唇。

あの情景で互いを見合せたもの。

「・・・・・ 考えさせて」

「 ふ、構わぬ。私には待つだけの時間がある故な」

その時初めて恋をした。

神の末裔たる魔性と、小さな少女のそれが始まりだった。

(後書き)

急に、吸血鬼との恋愛を書きたくなりました。

本来はもっと周りの状況等を書きこむ方なのでこんなに短くまとめたのは久しぶり。

実際の二人の先の事なども、書いてみたいような気はしますけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9321p/>

白銀恋

2011年1月9日06時40分発行